

「学生アスリート」の情勢と「学生アスリート」が実施可能な「地域スポーツ振興」について

2021年1月から約3か月間、長崎国際大学においてスポーツ支援・振興室アドバイザーの立場で、学生たちがアスリートとしてどのような状況にあるのか、また「スポーツ支援・振興室」の方と学生が活躍する持続可能な「地域スポーツ振興」における今後の展開について、複数回ミーティングを実施し、考えていきました。

最初に、私の経歴を紹介いたします。私は地元長崎県の出身で佐世保市内の高校を卒業後、

2011（平成23）年8月 全国高等学校総合体育大会 アーチェリー競技 個人優勝

2012（平成24）年4月 長崎国際大学人間社会学部国際観光学科入学

アーチェリー部入部

第54回全日本ターゲットアーチェリー選手権大会 個人優勝

2014（平成26）年 第49回全日本学生アーチェリー女子王座決定戦 団体準優勝

長崎がんばらんば国体/第69回国民体育大会 団体優勝

2015（平成27）年 ワールドカップ第2戦アンタルヤ大会 団体優勝

第50回全日本学生アーチェリー女子王座決定戦 団体準優勝

2016（平成28）年3月 長崎国際大学人間社会学部国際観光学科卒業

4月 株式会社ミキハウス 入社

リオデジャネイロオリンピック 日本代表 団体ベスト8

希望郷岩手国体/第71回国民体育大会 団体・個人優勝

第57回全日本ターゲットアーチェリー選手権大会 個人優勝

2017（平成29） 第1回ISPS HANDA CUP アーチェリー大会 団体優勝

です。

まず、私が考える「アスリートとして必要な要素」に、①言語化（可視化）ができ、それを他に伝達（発信）ができること、②目標計画が短期・中期・長期で立てられること、③課題発見とその解決に対する努力や工夫ができること、④努力の継続と、そのために必要な工夫ができること、⑤何事にも感謝し、起きた出来事全てに責任を持つ意識、⑥自身の強制力を持つこと、⑦周りに愛される（応援される）キャラクターづくり、を挙げます。

これらは、私自身も、長崎国際大学で「学生アスリート」として在籍していた際に培いました。多感な大学生の時期に、自分自身と向き合う時間を豊富に持てたことが大きく関わっており、学内外のトップ選手たちからジュニアアスリートまで、幅広い層の人たちとの関わりが増え、勿論、学内の関係者の皆さま、指導者の皆さまのご指導も含め、関係性が深まったことで築いてきました。

また、私が「トップアスリート」を目指そうと思ったきっかけは、高校生の頃に見た日本や盛会のトップ選手たちの存在です。それらトップ選手の中には、私と4～5歳しか変わらない大学生の姿も多くありました。年齢が近い大学生が世界で活躍する姿は、私に日本代表やオリンピックが、はるか遠いものではないことを気づかされ、教えてくれました。

そして、その「トップアスリート」である大学生たちは、挨拶などの言葉、試合中の相手に対する礼儀などの行動、相手選手に対する尊敬（リスペクト）の念を持った思いやり、常に堂々とした立ち振る舞い、さらに時折見せる優しい笑顔、それらの姿はほとんどが総じて「かっこいい。あんな選手になりたい。」と思わせるほどでした。

その「トップアスリート」である大学生たちの姿を見て、私が大学生になった時に必ず「トップアスリート」としての自覚を持ち、自分よりも下の世代に「きっかけ」を与える役割、世界との「橋渡

し役」としての立場により、活動、行動をしなければならないと思っていました。この考えをベースに、本学で4年間の学生生活、そしてミキハウスでのプロ生活の後、現在は長崎国際大学に所属させて頂いていただいております。

さて、「アスリート」とは、どのような定義でしょうか？私が考える「アスリート」とは、上述しましたが、特に強化指定部の学生の皆さん、

自律（自立）すること

“勝つ”ための努力を継続すること

子ども達への手本となる立ち振る舞いを行うこと

スポーツを通じて人生を豊かにすること

長崎国際大学強化指定部としてプライドを持つこと

これらのような考えを持ち、「学生アスリート」として行動していますか？一度、振り返ってみましょう。

主に、私は指導者として、アーチェリー部の部員の皆さんと活動を共にしてきているのですが、一人の「学生アスリート」としての生活習慣や立ち振る舞いなどにおいて、まだまだ改善の余地があり、「学生アスリート」として大成する可能性が十分にあると思わせる部員がほとんどであると感じることが出来ました。

これは、高校時代やジュニア時代と比べて、指導者や大人の目が減ってしまったこと、全国大会への参加経験が少なくなってきたことも関係していると思います。他者からの評価が、ダイレクトに自分たちに届くという機会が減り、部員自身の狭い自己評価だけでの人格形成が成されてしまっていると感じました。

私が経験して築いた「アスリートとしての要素」は、プロアスリートや社会人アスリートだけが持っていたら良いものではなく、次世代を担う子どもたちに近い存在である「大学生」が持つべき要素だと強く思っています。

次世代を担う子どもたちにとって、年齢の近いお兄さんやお姉さんの言動は、時に怖い存在になりうる大人の言動よりも優しく、直接響くことがあります。「地域スポーツ」を広く・深く発展させるために必要な要素は、プロアスリートを起用しての呼び込みだけではなく、近所の身近な存在である大学生のお兄さん・お姉さんとの繋がりにあると思われれます。

「大きくなったら一緒の舞台でプレーしよう。」だとか、「お兄さん（お姉さん）と同じ学校に行くと、お兄さん（お姉さん）のような人になりたい。」など、子ども達がスポーツを続ける理由として、プロアスリートの存在と同じような価値があります。

このような状況の中、本学の「学生アスリート」である彼ら、彼女らに対し、「学生アスリート」としての意識の醸成・向上が育つ環境と道筋は、大学の関係者や競技団体である大人から学生にヒントや手を差し伸べて欲しいと感じています。私もそのように思いながら、大学生活を過ごしていました。大学生と言っても、大人と子供の間中途半端な時期・立場ですが、伸びしろを強く感じる世代でもあります。体育会系の部活動に所属すると、その知識や情報が偏る可能性は大いにあります。一人では考えが至らず、悩んだり、困ったりしたものです。

強化指定部員における意識改革や人格形成、卒業後のライフスキル取得などにおけるキャリア形成、特に学生時代はファーストキャリア、卒業後のセカンドキャリア、現役引退後はサードキャリアを形成期間として、1人の人間として生きていくのに必要な力を身につけられる環境を整備するためにも、現在、私が所属している「スポーツ支援・振興室」と4月に新設される「スポーツサポートセンター」

にて、議論していただき、スポーツ分野における更なる環境整備をめざしていただければと思います。勿論、私自身もアドバイザーとして、サポートします。

今後、強化指定部の学生に対し、指導者からの勝つための指導に加え、「地域スポーツ振興活動」による経験を掴むプログラムやキャリア支援等により、「この大学に来たから身についたこと」という他大学との差別化を図るためにも、更なるスポーツ分野における環境整備は不可欠であると感じました。各強化指定部の部活動に応じて、各指導者の指導方針はあるかと思いますが、「幹」の部分については大学で統一し、部活動単体で動くよりも「NIU スポーツ」として組織化することで、大きな影響を学内外問わず与え、大学としての評価にも確実に繋がると思います。

大学という心強い・力強い支援体制がある中で、本学のスポーツ系の大学生は、部活動及びスポーツを通して、自分で試行錯誤する楽しさ、大変さを思いっきり経験することができます。私は、その環境のなかで大きく飛躍できた1人です。

部員の皆さんにとっては、大変なことではありますし、一筋縄ではいかないことが多いです。しかし、「部活動及び地域スポーツ振興活動等、スポーツを通じた経験が、卒業後に一人の人間として大いに活躍できる力になる」、そのような学生時代であるべきだと思います。そのためには、強化指定部の部員の皆さんの考え方が変わるだけでなく、指導者、大学側のサポート体制、大学のサポーターである地域の皆さまからの評価を受ける機会の豊富さ、学生の「アスリート」としての育成の機会の多さが必要となってくると思います。

最後になりますが、私は現在、2024年のパリオリンピックで金メダルを目標に日々鍛錬しており、競技人生の最後に大きな花を添えたいと考えております。一人の「トップアスリート」として、また学生たちの先輩として、私の経験や知識を共有することはもちろんのこと、一緒に世界の舞台に立つ学生アスリートのために、これからも尽力していきたいと思っております。

長崎国際大学の強化指定部の皆さん、

「競技力向上」と「地域スポーツ振興」の両面を兼ね備えた「アスリート」となり、
私と一緒に日本、アジア、世界に「挑戦」しましょう。

2021（令和3）年3月19日

長崎国際大学スポーツ支援・振興室

アドバイザー 永峰 沙織

